

## 長野県の高校生における社会的スキルの関連要因

有賀美恵子<sup>1)</sup>, 鈴木英子<sup>1)</sup>, 多賀谷昭<sup>1)</sup>

**【要 旨】** 本研究は、高校生の社会的スキルの関連要因を明らかにし、日常の教育活動に活かすことができるアセスメント指標や社会的スキル向上への支援方法を検討することを目的とした。長野県の公立高校3校に在籍する1,756人を対象として自記式質問紙調査を実施した。階層的重回帰分析の結果、性別、コミュニケーションの手段、対人恐怖心性、意欲、ストレスコーピング、基本的信頼感、異性の交際相手やメル友からのソーシャルサポートが社会的スキルと有意に関連していた。中でも対人恐怖心性が最も強く関連していた。ソーシャルスキルトレーニング (Social Skills Training ; 以下SST) は、学校不適応や対人関係能力向上への支援方法として期待されている。今後は、対人恐怖心性についてのアセスメントを行い、高い者に対して、保健室等での日常的な支援の中で社会的スキル向上を目指した指導を行うことがより効果的であろう。今後、因果関係解明のための縦断研究とともに、高校生へのより効果的な支援方法を開発するための実証的な研究の積み上げが望まれる。

**【キーワード】** 高校生, 社会的スキル, 対人恐怖心性, ソーシャルスキルトレーニング

### I. はじめに

近年、わが国では、学校におけるソーシャルスキルトレーニング (Social Skills Training ; 以下, SST) が盛んに実施されるようになった。SSTはSalter, Wolpe, Libermanらによって精神医学領域で開発された認知行動療法で (Liberman, 1989), 日本には1980年代末に導入され (相川, 2009), 1990年代に統合失調症患者の社会復帰訓練 (宮内, 1995) として定着した。その後、矯正領域でもSSTは注目され、受刑者 (岸本, 2008) や少年犯罪・非行 (角谷, 2008) の更生のために実施されてきた。さらに、教育領域では、児童の孤独感の低減 (金山ら, 2000), 不登校の生徒 (渡辺ら, 2003) や発達障害児 (興津ら, 2007) への支援などに利用され、学級崩壊や不登校をはじめとする学校不適応や対人関係能力向上への支

援方法として期待されている。

小学生や中学生を対象としたSSTは盛んに行われており、対人関係の発達を意図的、組織的に促すことを目指し (後藤, 2001), 子どもの社会的スキルを高めることによって、人間関係上のトラブルから引き起こされる問題の改善を図ることが目的とされている (江村ら, 2003)。また、SSTは、不適応の発生予防や不適応予備群にある子どもたちへの早期介入による予防として意義があり、子どもたちの不適応などの一次予防プログラムとして機能すると考えられている (西岡ら, 2007)。

しかし、高校生に対するSSTへの関心は高まっているにもかかわらず、高校生を対象としたSSTの研究は少ない (小林ら, 2003 ; 渡辺ら, 2007)。青年期以降は高度な社会的スキルが必要で、高校生は社会に出ていく前段階としてそれまで学んできたスキルをさら

<sup>1)</sup> 長野県看護大学  
2010年9月29日受付  
2011年2月2日受理

に洗練させることが必要となる（相川ら，2006）．社会的スキルの習得や成熟が社会的適応や精神的健康にとって必須の技能である以上，社会的スキルを高める教育や訓練は重要な課題といえる（青木，2005）．学校現場において実際にSSTのプログラムを展開するには，活動内容の汎化が課題であり，小野寺ら（2003）は，特定の方法にこだわらず，SSTの手法や要素を日常の教育活動の中に取り入れることが汎化につながると述べている．また，相川（2009）は，どのような形態のトレーニングが適切で効果的かは，クライアントの特性や障害の特徴，獲得させたい標的スキルの種類によって異なり，集団で実施する形態が常に良いとは限らないと指摘している．さらに，学校の生徒を対象としてSSTを実施する場合，患者等を対象とする場合と異なり，予防的・開発的視点に立った長期的・体系的なソーシャルスキル教育（Social Skill Education；以下SSE）が必要とされる（江村ら，2003；瀧ら，2008）．

そこで，我々は社会的スキルや対人関係能力の向上には，SSTの実施だけでなく，日常の生活や教育活動の中で生徒の状態をアセスメントし，毎日の教育活動を通して予防的・開発的援助や活動を行うことが必要なのではないかと考えた．ゆえに，社会的スキルと学校場面や生活場面における様々な変数との関連を明らかにし，その結果から，日常の教育活動に生かすことのできるアセスメントの指標や援助方法を検討したいと考える．

社会的スキルの関連要因については，中学生を対象とした研究で金山ら（2002）が孤独感を，大学生を対象とした研究で福山（2000），原田ら（2002）が対人不安を，相川ら（2007）が抑うつ，孤独感，対人不安を，杉浦ら（2007）がストレス反応，対人恐怖心性を報告している．高校生を対象とした研究では，金子ら（2007a，2007b）が攻撃性との関連を，青木（2007）が自己効力感，敵意，間接的攻撃，いらだち，身体的暴力，言語的攻撃との関連を報告している．社会的スキルの未熟さは，子どもたちの対人関係における不適切な言動や学校への不適応の原因のひとつとして捉えられている（瀧ら，2008）．こうした中，高校生を対象とした研究は，問題行動との関連に焦点が当

てられており，数も少ない．また，高校生の対人関係能力の低下や社会的スキルの学習不足は，特定の生徒に限らず，今日の高校生に共通の課題とされている（渡辺ら，2007）．そこで，我々は，高校生の社会的スキルの関連要因を，生活全体を視野に入れ，社会心理学的な観点から探究し，有効な支援を行うための具体的なアセスメントの指標や支援方法を検討した．

## II. 本研究の概念枠組み

本研究の概念枠組みを図1に示した．学校場面や生活場面全体を視野に入れ，社会心理学的な観点から，高校生の社会的スキルの関連要因は，属性，生活環境，生活習慣，心理社会的要因からなると考えた．

属性は，学年，年齢，性別，同居家族の人数と内訳に加えて，著者の養護教諭としての経験から不定愁訴と精神的な不調・精神の病気による受診（以下，精神の不調による受診）をあげた．

生活環境は，部活動加入状況，コミュニケーションの手段，携帯電話を持った時期，保健室利用状況，親の養育態度をあげた．部活動は，学校生活に占める役割が大きいと考えられ，社会的スキルを習得する場のひとつと考えられるため選択した．コミュニケーションと保健室利用状況は，著者の養護教諭としての経験から考えた．社会的スキルは学習可能な行動であり（Lieberman，1989），乳児期に形成された愛着により様々な能力を獲得し，さらに社会的相互作用により能力が増大していくとされている（渡辺ら，1996）．親との関係は，子どもの社会的スキルの発達にとって重要な役割を果たすと考えられるため，子どもが評価する親の養育態度を選択した．

生活習慣は，著者の養護教諭としての経験から，学校生活や日常生活と密接な関係があると考えられる朝食摂取状況，睡眠状況，飲酒経験，喫煙経験をあげた．

心理社会的要因は，対人恐怖心性，自尊感情，基本的信頼感，ソーシャルサポート，不登校経験，いじめられた経験，将来の夢や目標，意欲，ストレス・コーピングの9項目の変数をあげた．社会的スキルと対人恐怖心性との関連は，大学生を対象とした研究（杉浦ら，2007）や海外の研究（Arkowitz et al.，1978；

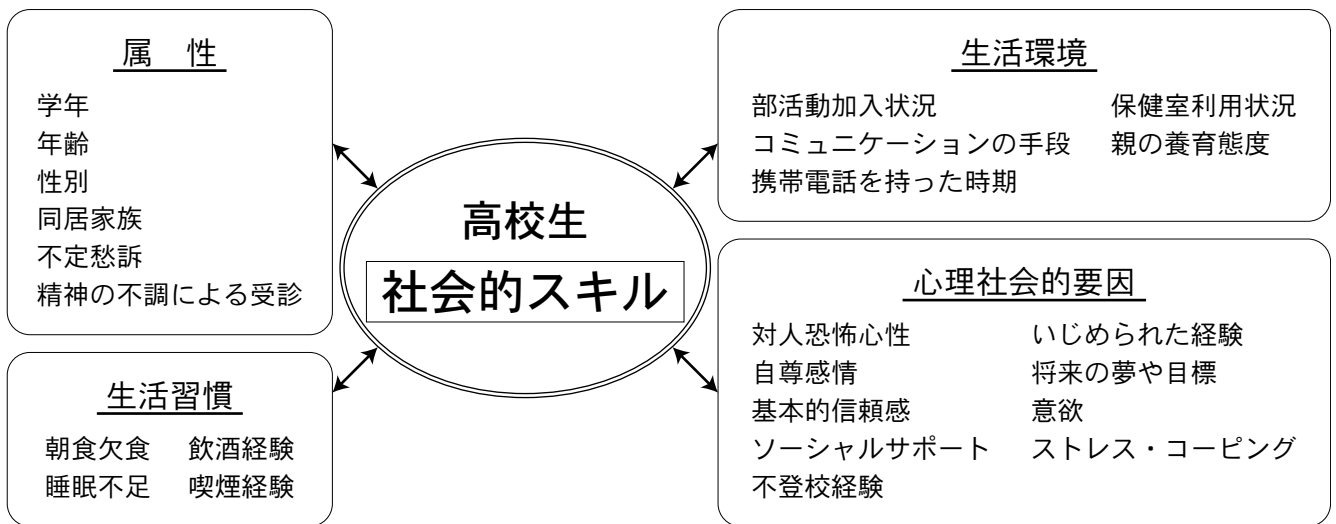


図1 本研究の概念枠組み

Leary, 1990) で報告されているが、日本の高校生を対象とした研究は見当たらなかったため、対人恐怖心性を選択した。社会的スキルとストレスとの関連は、1970年代から注目されており、Lazarusら(1984)は、社会的スキルが対処行動の原動力として重要な役割を持つと述べている。日本では、杉浦ら(2007)が大学生を対象とした研究で、社会的スキルとストレス反応との関連を報告している。本研究では、ストレス・コーピングに焦点を当て、社会的スキルとの関連を明らかにしたいと考えた。他の7項目の変数は、著者の養護教諭としての経験から考えた。

### III. 研究方法

#### 1. 対象と調査方法

まず、長野県の公立高等学校(全日制普通科の高等学校で、学科転換または募集停止の学校を除く56校)でホームページ上に大学進学率を公開している34校を、進学率により3層(A, B, C)に分類した。各層について、平均的な生徒数の高校の学校長に口頭および文書にて調査依頼を行い、同意の得られた1校を対象とした。対象校は、地域が偏らないよう留意し、A層, B層, C層の順に選定した。同意を得られた3校に在籍する高校生1,756人を対象として、2009年6月中旬から7月に自記式質問紙調査を実施し、各ホームルーム教室に回収箱を設置して回収した。

#### 2. 調査内容

##### 1) 社会的スキル

菊池(2007)のKiSS-18を使用した。これは18項目の評価尺度であり、得点が高いほど社会的スキルが高いと解釈される。信頼性係数(Cronbachの $\alpha$ 係数)は、菊池(1988)が、男子大学生60名について0.83、女子大学生67名について0.86と報告している。この他にも多くの報告があり(菊池, 2007)、内部一貫性と安定性について信頼性が確認されている。妥当性は、多くの他の尺度との関係だけでなく、コミュニケーション行動や性行動などの具体的行動との関係や他者評価でも認められており(菊池, 2007)、十分な妥当性が確認されている。以上のように、本尺度は高い信頼性を有し、妥当性に関しても極めて高い尺度であるといえる。さらに、多くの研究で使用され、18項目と項目数が少ないため、簡便に実施することが可能である。そこで、本尺度を社会的スキルの測定に用いることとした。本尺度の使用に関しては、作成者の承認を得た(2009年)。

##### 2) 属性

学年, 年齢, 性別, 同居家族の人数と内訳, 不定愁訴, 精神の不調による受診の有無をたずねた。

##### 3) 生活環境

部活動加入状況は、「運動系」, 「文科系」, 「両方加入」, 「なし」から1つ選択するように求めた。コミュニケーションの手段は、「友達とコミュニケーションをとる手段として、あなたが最も多く使用するもの

を以下の4つから1つ選んでください」で回答を求め、「会って話す」(以下、「話す」)、「電話で話す」(以下、「電話」)、「メール」,「手紙」から1つ選択するように求めた。携帯電話を持った時期は、「持っていない」,「持っている」のどちらかを選択させ、「持っている」と回答した者について、「小6以下」,「中1」,「中2」,「中3」,「高1」,「高2」,「高3」から1つ選択するように求めた。保健室利用状況は、「ほとんどない」,「月に数回」,「週に数回」,「ほぼ毎日または一日に何度も」(以下、「ほぼ毎日」)から1つ選択するように求めた。親の養育態度は、Parker, G.らが作成したParental Bonding Instrument (PBI) の邦訳版(小川, 1991)を参考にし、養護項目として「私の親は、暖かくて、私に理解があったと思う」を、過保護項目として「私の親は、過保護だったと思う」という質問項目を作成し、ビジュアルアナログスケールで測定した。PBIは、16歳までの記憶について回答を求めるが、本研究では、中学生までの記憶について回答を求めることとした。

#### 4) 生活習慣

朝食摂取状況は、「毎朝食べる」,「時々食べる」,「時々食べない」,「毎朝食べない」から1つ選択するように求めた。睡眠状況は、「0時以降に寝ることは少ない」,「どちらともいえない」,「0時以降に寝ることが多い」から1つ選択するように求めた。飲酒経験の有無、喫煙経験の有無をたずねた。

#### 5) 心理社会的要因

##### (1) 対人恐怖心性

堀井・小川(1997)の対人恐怖心性尺度を使用した。これは、30項目の評価尺度で、[尺度Ⅰ〈自分や他人が気になる〉悩み]、[尺度Ⅱ〈集団に溶け込めない〉悩み]、[尺度Ⅲ〈社会的場面で当惑する〉悩み]、[尺度Ⅳ〈目が気になる〉悩み]、[尺度Ⅴ〈自分を統制できない〉悩み]、[尺度Ⅵ〈生きることに疲れている〉悩み]の6つの下位尺度で構成され、得点が高いほど対人恐怖心性が強いと解釈される。堀井・小川(1996)が932名(中学生313名、高校生303名)を対象にした因子分析の結果、累積寄与率は53.2%であり、信頼性係数(Cronbachの $\alpha$ 係数)は、各下位尺度で0.79から0.89といずれも十分な値であり、内的整合性が確

認されている。妥当性については、大学生738名を対象に境界例水準の不安を測定する内的崩壊感尺度(穂苅ら, 1993)との相関分析が、大学生380名を対象に自己意識尺度(黒沢, 1992)との相関分析が行われ、有意な相関が認められている(堀井・小川, 1996)。また、大学生312名を対象にした検討では、因子累積寄与率(58.7%)、折半法(全体で $r \geq 0.82$ , 男子 $r \geq 0.79$ , 女子 $r \geq 0.80$ )で十分な妥当性が得られている。Y-G性格検査との関連性から構成概念妥当性が確認されている(堀井・小川, 1997)。なお、本質問紙使用に際し、作成者の承認を得た(2009年)。

##### (2) 自尊感情

Rosenberg, M.により作成されたself-esteem scaleの邦訳版(山本・松井・山成, 1982)を参考にし、「私は全く価値がない人間だと思うことがある」という質問項目を作成し、ビジュアルアナログスケールにより測定した。

##### (3) 基本的信頼感

谷(1996)が作成した基本的信頼感尺度を参考にし、「私は自分を信頼できる人間だと感じる」という質問項目を作成し、ビジュアルアナログスケールにより測定した。

##### (4) ソーシャルサポートの有無と内訳

まず、現在の学校生活での悩みや問題についての相談相手の有無についてたずねた。次に、「あり」と回答した者について、「家族」,「学校内の友人」,「学校外の友人」,「会ったことのないメル友やウェブサイト上の友人や知り合い」(以下、「メル友」)、「彼女または彼女」(以下、「異性の交際相手」)、「担任」,「保健室の先生」(以下、「養護教諭」)、「部活動顧問」,「その他」のうち、当てはまるものをいくつでも選択するように求めた。

##### (5) 不登校経験の有無

##### (6) いじめられた経験の有無

##### (7) 将来の夢や目標の有無

##### (8) 意欲

下坂(2001)が作成した無気力感尺度を参考にし、「私は何ごとにも積極的に取り組む意欲があると思う」という質問項目を作成し、ビジュアルアナログスケールにより測定した。

## (9) ストレス・コーピング

Pineら (1982) のcoping taxonomyおよび庄司ら (1992) の職場用コーピング尺度を参考に質問項目を作成した。「苦しい、嫌な、困った出来事を体験したとき、あなたが最もとりがちだと思われる行動を以下の4つから1つ選んでください」で回答を求め、「その問題にはかかわらないようにする」(以下、「問題にかかわらない」)、「問題の原因となった自分の行動ややり方を変える」(以下、「自分のやり方を変える」)、「その問題の関係者・当事者と話し合う」(以下、「話し合う」)、「酒や薬に頼る」から1つ選択するように求めた。

## 3. 分析方法

次のような手順で分析を行った。統計分析には、SPSS Statistics 17.0を使用した。

- 1) 対象の特性について基礎統計量を算出した。
- 2) 属性、生活環境、生活習慣、心理社会的要因によって、社会的スキルの平均得点に違いがあるかを検討した。有意差の検定には、t検定、一元配置分散分析および多重比較を用いた。
- 3) 社会的スキルの関連要因を明らかにするために、社会的スキル尺度得点を目的変数とし、属性、生活環境、生活習慣、心理社会的要因を説明変数として階層的重回帰分析を行った。携帯電話を持った時期は、「小6以下」、「中学校」、「高校」、「持っていない」

表1 対象者の属性別社会的スキル平均得点

(N=1169)

対象者の属性		N	(%)	社会的スキル平均得点	
学年	1	416	(35.6)	56.7	
	2	356	(30.5)	55.9	
	3	397	(34.0)	56.9	
性別	男子	533	(45.6)	56.9	
	女子	636	(54.4)	56.2	
同居家族 (複数回答)	祖父と同居	有	285	(24.4)	55.5*
		無	883	(75.5)	56.8
	祖母と同居	有	444	(38.0)	55.6*
		無	724	(61.9)	57.0
	父と同居	有	1027	(87.9)	56.6
		無	141	(12.1)	56.1
	母と同居	有	1134	(97.0)	56.5
		無	34	(2.9)	56.0
	兄と同居	有	213	(18.2)	55.4
		無	955	(81.7)	56.7
	姉と同居	有	231	(19.8)	56.5
		無	937	(80.2)	56.5
	弟と同居	有	369	(31.6)	56.9
		無	799	(68.3)	56.3
	妹と同居	有	368	(31.5)	56.9
		無	800	(68.4)	56.3
	その他	有	28	(2.4)	55.9
		無	1140	(97.5)	56.5
不定愁訴	有	275	(23.5)	54.1**	
	無	890	(76.1)	57.3	
精神の不調による受診	受診している	7	(0.6)	53.3**	
	以前に受診していた	47	(4.0)	54.3	
	受診したことはないが、受診したい	27	(2.3)	49.9	
	受診したことはない	1087	(93.1)	56.8	

\*: p&lt;0.05, \*\*: p&lt;0.01

の4区分に変換し、ほぼ3年間隔であるため、間隔尺度とみなして取り扱った。それ以外の順序変数は2値変数に変換した。それらの変数は、精神の不調による受診（受診経験の有無に変換）、部活動加入状況（文科系部活動加入の有無と運動系部活動加入の有無の2変数に変換）、コミュニケーションの手段（主な手段がメールであるか否かに変換）、保健室利用状況（ほとんど利用がない者とそれ以外に変換）、朝食摂取状況（欠食が時々以下か否かに変換）、睡眠状況（0時以降に寝ることが多いか否かに変換）、いじめられた経験（「どちらともいえない」を「ない」に含める）、ストレス・コーピング（問題解決が直接的か否かと積極的か否かの2変数に変換）である。

#### IV. 倫理的配慮

対象高校の管理職に対し、研究の趣旨を文書と口頭で説明し、理解と同意を得て質問紙を配布した。対象者には、質問紙とともに配布した文書により、研究の目的、方法、倫理的配慮を説明し、自由意思による回答の提出を依頼した。本研究計画は、長野県看護大学倫理委員会の審査を受け承認を得た（2009年5月26日、審査番号#6）。

#### V. 結果

##### 1. 対象者の特性

回答者は、1,539人（87.6%）であった。このうち、学年、年齢、性別、対人恐怖心性、社会的スキルに欠

表2 生活環境・生活習慣別社会的スキル平均得点

(N=1169)

生活環境・生活習慣	N	(%)	社会的スキル平均得点	
部活動	運動系に加入	676	(58.0)	57.4**
	文科系に加入	324	(27.8)	54.9
	両方に加入	4	(0.3)	65.5
	未加入	162	(13.9)	56.1
コミュニケーションの手段	会って話す	875	(76.2)	56.9
	電話で話す	18	(1.6)	58.4
	メール	253	(22.0)	55.3
	手紙	2	(0.2)	48.5
携帯電話を持った時期	持っていない	16	(1.4)	47.5**
	小6以下	56	(4.9)	56.4
	中学校	456	(9.7)	57.4
	高等学校	610	(9.3)	56.0
保健室利用状況	ほとんどない	1015	(91.1)	56.8*
	月に数回	89	(8.0)	53.8
	週に数回	8	(0.7)	49.0
	ほぼ毎日または一日に何度も	2	(0.2)	52.5
朝食摂取状況	毎朝食べる	1015	(87.0)	56.7
	時々食べる	61	(5.2)	55.8
	時々食べない	71	(6.1)	55.0
	毎朝食べない	19	(1.6)	54.9
睡眠状況	0時以降に寝ることは少ない	376	(32.3)	56.1
	どちらともいえない	348	(29.9)	56.8
	0時以降に寝ることが多い	439	(37.7)	56.5
飲酒経験	有	422	(36.5)	56.4
	無	735	(63.5)	56.5
喫煙経験	有	64	(5.5)	56.6
	無	1094	(94.6)	56.5

\*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$

損重複がない有効回答1,169人分（66.5%）を解析の対象とした。有効回答率は1校が約45%、他の2校は70%前後であった。

## 2. 対象者の属性と社会的スキル

有効回答を提出した対象者は、1年生が416人（男子198人、女子218人）、2年生が356人（男子153人、女子203人）、3年生が397人（男子182人、女子215人）であった。

社会的スキル平均得点を対象者の属性別に表1に示した。学年間、男女間で有意差はなかった。祖父と同居をしている者（ $P<0.05$ ）、祖母と同居をしている

者（ $P<0.05$ ）、不定愁訴のある者（ $P<0.01$ ）、精神の不調による受診経験のある者（ $P<0.01$ ）の平均得点が有意に低かった。

## 3. 生活環境、および生活習慣と社会的スキル

社会的スキルの平均得点を、生活環境および生活習慣別に表2に示した。運動系部活動に加入している者の平均得点は、文化系部活動に加入している者に比べて有意に高かった（ $P<0.01$ ）。携帯電話を持っていない者の平均得点は、他の者に比べて有意に低かった（ $P<0.01$ ）。保健室利用状況がほとんどない者の平均得点は、他の者に比べて有意に高かった（ $P<0.05$ ）。

表3 心理社会的要因別社会的スキル平均得点

(N=1169)

心理社会的要因		N	(%)	社会的スキル平均得点	
相談相手	有	995	(86.2)	57.2**	
	無	159	(13.8)	51.8	
ソーシャルサポート (複数回答)	家族	有	597	(51.1)	57.3**
		無	572	(48.9)	55.7
	学校内の友人	有	815	(69.7)	57.8**
		無	354	(30.3)	53.6
	学校外の友人	有	522	(44.7)	57.1*
		無	647	(55.3)	56.0
	メル友	有	21	(1.8)	55.2
		無	1148	(98.2)	56.5
	異性の交際相手	有	126	(10.8)	59.8**
		無	1043	(89.2)	56.1
	担任	有	81	(6.9)	57.8
		無	1088	(93.1)	56.4
	養護教諭	有	34	(2.9)	55.4
		無	1135	(97.1)	56.5
部活動顧問	有	51	(4.4)	60.6**	
	無	1118	(95.6)	56.3	
その他	有	31	(2.7)	57.9	
	無	1138	(97.3)	56.5	
不登校経験	有	72	(6.2)	55.6	
	無	1093	(93.8)	56.6	
いじめられた経験	有	183	(15.9)	55.2*	
	無	701	(60.7)	57.2	
	どちらともいえない	270	(23.4)	55.6	
将来の夢・目標	有	859	(73.5)	57.4*	
	無	310	(26.5)	54.1	
ストレス・コーピング	自分のやり方を変える（直接的-積極的）	561	(48.3)	57.8**	
	話し合う（非直接的-積極的）	163	(14.0)	58.9	
	問題にかかわらない（直接的-非積極的）	434	(37.3)	54.0	
	酒や薬に頼る（非直接的-非積極的）	4	(0.3)	47.0	

\*:  $p<0.05$ , \*\*:  $p<0.01$

#### 4. 心理社会的変数と社会的スキル

社会的スキル平均得点と心理社会的変数との関連を表3に示した。相談相手 ( $P<0.01$ )、家族からのソーシャルサポート ( $P<0.01$ )、学校内の友人からのソーシャルサポート ( $P<0.01$ )、学校外の友人からのソーシャルサポート ( $P<0.05$ )、異性の交際相手からのソーシャルサポート ( $P<0.01$ )、部活動顧問からのソーシャルサポート ( $P<0.01$ ) がある者の平均得点は、ない者に比べて有意に高かった。いじめられた経験がある者の平均得点は、ない者に比べて有意に低かった ( $P<0.05$ )。将来の夢や目標がある者の平均得点は、ない者に比べて有意に高かった ( $P<0.01$ )。積極的な問題解決型のコーピングを選択する者の平均得点は、非積極的な者に比べて有意に高かった ( $P<0.01$ )。

#### 5. 年齢、親の養育態度、対人恐怖心性、自尊感情、基本的信頼感、意欲（連続変数の測定項目）と社会的スキル

連続変数の測定項目の平均得点と社会的スキルとの相関係数を表4に示した。社会的スキルは、対人恐怖

心性とは中程度の負の相関 ( $r=-0.71, P<0.01$ ) を、また、自尊感情 ( $r=0.36, P<0.01$ )、基本的信頼感 ( $r=0.28, P<0.01$ )、意欲 ( $r=0.35, P<0.01$ ) とは弱い正の相関を示した。

#### 6. 階層的重回帰分析による社会的スキルの関連要因

階層的重回帰分析の結果を表5に示した。属性、生活環境、生活習慣による影響を調整するために、第1ステップで属性を、第2ステップで生活環境と生活習慣を強制投入した後、第3ステップで心理社会的要因を投入し、ステップワイズ法により変数選択を行った。その際、多重共線性を回避するために、年齢、同居家族の人数、文科系部活動加入の有無、相談相手の有無を説明変数から除外した。

第1ステップでは、不定愁訴 ( $\beta=-0.13, P<0.01$ )、精神の不調による受診 ( $\beta=-0.09, P<0.01$ ) が社会的スキルの有意な関連要因であった。第2ステップでは、不定愁訴 ( $\beta=-0.11, P<0.01$ )、精神の不調による受診 ( $\beta=-0.08, P<0.05$ )、運動系部活動加入 ( $\beta=0.07, P<0.05$ )、コミュニケーションの主な手段がメールであること ( $\beta=-0.08,$

表4 連続変数の測定項目の平均得点と、社会的スキルとの相関係数

測定項目	N	平均	SD	社会的スキルとの相関係数
年齢	1169	16.3	±1.0	0.05
対人恐怖心性	1169	76.0	±29.0	-0.71**
自分や他人が気になる悩み	1169	15.1	±5.9	-0.47**
集団に溶け込めない悩み	1169	11.6	±6.5	-0.60**
社会的場面で当惑する悩み	1169	13.5	±6.6	-0.63**
目が気になる悩み	1169	10.7	±6.4	-0.56**
自分を統制できない悩み	1169	13.4	±5.8	-0.59**
生きることに疲れている悩み	1169	11.7	±5.8	-0.50**
自尊感情	1153	59.4	±26.5	0.36**
基本的信頼感	1154	47.8	±22.9	0.28**
意欲	1154	53.3	±23.0	0.35**
親の養育態度				
養護的	1148	61.7	±27.0	0.12**
過保護	1153	38.0	±27.5	-0.05

\*:  $p<0.05$ , \*\*:  $p<0.01$



表5 階層的重回帰分析による社会的スキルの関連要因

(N=1169)

説明変数	Step1		Step2		Step3	
	$\beta$	t 値	$\beta$	t 値	$\beta$	t 値
<b>属性</b>						
学年 <sup>a</sup>	0.019	0.613	0.008	0.241	0.027	1.184
性別 <sup>b</sup>	0.022	0.712	0.010	0.289	0.063**	2.652
<b>同居家族の内訳</b>						
祖父	-0.026	-0.678	-0.019	-0.514	-0.015	-0.563
祖母	-0.050	-1.308	-0.051	-1.341	-0.028	-1.057
父	0.006	0.190	0.000	-0.015	0.002	0.072
母	-0.028	-0.888	-0.036	-1.126	-0.004	-0.198
兄	-0.039	-1.229	-0.043	-1.324	-0.075**	-3.405
姉	0.001	0.031	-0.003	-0.102	0.013	0.593
弟	0.041	1.283	0.043	1.339	0.017	0.768
妹	0.011	0.343	0.014	0.431	0.032	1.436
その他	0.012	0.375	0.016	0.500	0.029	1.325
不定愁訴 <sup>c</sup>	-0.134**	-4.156	-0.106**	-3.177	0.045	1.910
精神の不調による受診 <sup>d</sup>	-0.085**	-2.623	-0.076*	-2.285	-0.004	-0.177
<b>生活環境</b>						
運動系部活動加入 <sup>e</sup>			0.070*	2.082	-0.030	-1.297
コミュニケーションの主な手段：メール <sup>f</sup>			-0.080*	-2.519	-0.044*	-1.996
携帯電話をもった時期 <sup>g</sup>			-0.017	-0.518	0.032	1.455
保健室利用 <sup>h</sup>			-0.050	-1.495	-0.017	-0.747
<b>親の養育態度</b>						
養護的			0.087**	2.761	-0.050*	-2.176
過保護			-0.033	-1.036	0.005	0.242
<b>生活習慣</b>						
朝食欠食 <sup>i</sup>			-0.004	-0.123	-0.007	-0.317
睡眠不足 <sup>j</sup>			0.028	0.876	0.013	0.602
飲酒経験 <sup>k</sup>			0.012	0.368	-0.005	-0.215
喫煙経験 <sup>l</sup>			0.012	0.367	-0.037	-1.605
<b>心理社会的要因</b>						
対人恐怖心性					-0.675**	-27.413
意欲					0.086**	3.397
積極的な問題解決型コーピング <sup>m</sup>					0.067**	3.028
基本的信頼感					0.068**	2.761
<b>ソーシャルサポート</b>						
異性の交際相手 <sup>n</sup>					0.054*	2.439
学校内の友人 <sup>o</sup>					0.045*	1.988
R <sup>2</sup>	0.040**		0.062**		0.563**	
調整済みR <sup>2</sup>	0.028**		0.040**		0.550**	

\*: p&lt;0.05, \*\*: p&lt;0.01

<sup>a</sup> 1年生=1, 2年生=2, 3年生=3<sup>b</sup> 男性=1, 女性=0<sup>c</sup> 不定愁訴あり=1, なし=0<sup>d</sup> 精神の不調による受診あり=1, なし=0<sup>e</sup> 運動系部活動加入あり=1, なし=0<sup>f</sup> コミュニケーションの主な手段がメール=1, その他=0<sup>g</sup> 携帯電話を持っていない=0, 小学校=1, 中学校=2, 高校=3<sup>h</sup> 保健室利用あり=1, ほとんどなし=0<sup>i</sup> 朝食欠食あり=1, なし=0<sup>j</sup> 睡眠不足あり=1, なし=0<sup>k</sup> 飲酒経験あり=1, なし=0<sup>l</sup> 喫煙経験あり=1, なし=0<sup>m</sup> 積極的な問題解決型コーピングあり=1, なし=0<sup>n</sup> 異性の交際相手からのソーシャルサポートあり=1, なし=0<sup>o</sup> 学校内の友人からのソーシャルサポートあり=1, なし=0

$P < 0.05$ ), 親の養護的な養育態度 ( $\beta = 0.09$ ,  $P < 0.01$ ) が有意な関連要因であった。第3ステップでは、性別が男性であること ( $\beta = 0.06$ ,  $P < 0.01$ ), 兄との同居 ( $\beta = -0.08$ ,  $P < 0.01$ ), コミュニケーションの主な手段がメールであること ( $\beta = -0.04$ ,  $P < 0.05$ ), 親の養護的な養育態度 ( $\beta = -0.05$ ,  $P < 0.05$ ), 対人恐怖心性 ( $\beta = -0.68$ ,  $P < 0.01$ ), 意欲 ( $\beta = 0.09$ ,  $P < 0.01$ ), 積極的な問題解決型のコーピング ( $\beta = 0.07$ ,  $P < 0.01$ ), 基本的信頼感 ( $\beta = 0.07$ ,  $P < 0.01$ ), 異性の交際相手からのソーシャルサポート ( $\beta = 0.05$ ,  $P < 0.05$ ), 学校内の友人からのソーシャルサポート ( $\beta = 0.05$ ,  $P < 0.05$ ) が有意な関連要因で、自由度調整済決定係数は0.55であった。

## VI. 考 察

本研究で調査した長野県の公立高校3校のうち大学進学率の低い高校は、他の2校に比べて対象者数が少なく、有効回答率も低かった。しかし、各関連性がどの程度顕著に現れるかは進学率に依存したとしても、検出された関連性の内容は、進学率に依存する性格のものではない。また、田中(2001)は無効回答の発生状況を調査し、学歴の低い層は無効回答が多い傾向をもつことを報告している。このことは、研究の限界ではある。しかし、大学進学率の低い高校の有効回答率が他の2校に比べて低かったことは一般的にあり得ることであり、対象校を増やしても同様の結果が推測される。そこで、本研究結果は、長野県と長野県に類似した都道府県の高校生に一般化できる可能性が高いと考える。

本研究では、社会的スキルと属性、生活環境、生活習慣、心理社会的要因との関連の解明を試みた。階層的重回帰分析の結果、社会的スキルは属性、生活環境、心理社会的要因によって説明できることが示され、自由度調整済決定係数の値は0.55であった。本研究のような社会調査データにはノイズが多いので、決定係数が0.20を超えれば有効な分析とみなされる場合が多い(村瀬ら, 2007)ことからすると、社会的スキルの55%を関連要因で説明できていることは、十分に有効な分析結果であると考えられる。

社会的スキルの有意な関連要因の主なものは、性別、コミュニケーションの手段、対人恐怖心性、意欲、ストレス・コーピング、基本的信頼感、異性の交際相手や学校内の友人からのソーシャルサポートであり、最も強い関連要因は対人恐怖心性であった。社会的スキルと性別との関連については、ほとんど明らかにされていない(菊池, 2007)。しかし、本研究の結果は、女性の社会的スキルは男性より低い可能性を示唆している。

### 1. 社会的スキルとコミュニケーションの手段、ソーシャルサポート

本研究の結果、コミュニケーションの主な手段がメールである者は、社会的スキルが低い可能性が認められた。しかし、社会的スキルとコミュニケーションの手段との関連についての先行研究は見当たらなかった。わが国の携帯電話の普及率は非常に高く、公共の場における社会規範を逸脱した携帯メールの利用や、若者の携帯メールへの依存についての問題が指摘されている(吉田ら, 2005)。その一方で、若者にとってのメールや携帯電話は、単なる伝達の道具ではなく、「絆」を築き、大人や家族に対して若者独自の「秘密」の空間を作り出す(甘佐ら, 2004)ともいわれている。コミュニケーションの可能性を広げるはずの携帯電話やメールが、かえって社会的スキルを低下させるならば皮肉である。社会的スキルが学習可能な能力である(Liberman, 1989)ことから考えれば、社会的スキルの未熟さや学習不足には、メールや携帯電話の存在が大きく関係している可能性が考えられる。白井(2006)は、大学生を対象とした研究に基づいて、希薄化する人間関係に有用なツールとして携帯電話や電子メールが流行し、希薄化を加速したのでであろうと推測している。対人関係における直接的なコミュニケーションの中でこそ、社会的スキルの発達や獲得が進むのではないだろうか。本研究では因果関係を検証することはできないが、今後は、社会的スキルとコミュニケーションや携帯電話への依存との因果関係を明らかにする必要がある。

また、本研究の結果は、ソーシャルサポートのうちでも特に異性の交際相手や学校内の友人からのソー

シャルサポートがある者は社会的スキルが高いことを示している。このことは、社会的スキルが個人の選択に基づく人間関係の構築に関係していることを意味しており、思春期の成長における社会的スキルの重要性を示している。本研究のように相談相手を詳細に調査した先行研究はなく、これは興味深い結果である。

## 2. 社会的スキルとストレス・コーピング、意欲、基本的信頼感

社会的スキルとストレス・コーピングとの関連については、近藤ら（2005）が高校生を対象とした調査を行い、社会的スキルが高いほど積極的対処行動を、低いほど消極的対処行動をとる傾向があったと報告している。また、ストレス反応は、ストレスラーに対する認知的評価やコーピングにより異なることが指摘されている（飯田ら、2002）。本研究の結果も、積極的な問題解決型のコーピングを選択する者ほど社会的スキルが高いことを示唆しており、先行研究の結果と一致する。

さらに本研究は、意欲や基本的信頼感が高い者ほど社会的スキルが高い可能性があるという新しい知見を付け加えた。基本的信頼感は、自我同一性の基礎となり、その後の発達においても重要な役割を果たすと考えられており（Erikson,1955；1959）、本研究の結果はこのことと整合する。近年、人生目標や将来の職業に対する夢や希望等を持たない無気力な者の増加や学習意欲の低下が問題視されており（文部科学省、2003）、それは社会的スキルも低下させていると推測される。毎日の授業や部活動において、自ら困難を乗り越え、達成感を得て、自信を持つことができるよう、主体性を発揮させる指導方法とともに、若者が将来の夢や目標を持つことができるような支援が望まれる。

## 3. 社会的スキルと対人恐怖心性

社会的スキルと対人不安との関連については、異なる2つの立場から研究が行われてきた。その1つは、対人不安の発生や増大の原因を社会的スキルの欠如と捉えた「社会的スキル欠如仮説」である（Arkowitz et al., 1978）。もう1つは、自分の社会的スキルが欠如しているという自己評価が対人不安を引き起こすと

いう指摘である（Leary, 1990）。わが国では、杉浦ら（2007）が社会的スキルと対人恐怖心性との有意な負の相関を報告し、原田ら（2002）も、社会的スキルの自己評価が低い群は対人不安が有意に高いと報告している。これらは大学生を対象とした調査であったが、高校生を対象とした本研究でも、対人恐怖心性が高いほど社会的スキルが低いことが示唆された。

SSTの標準的な実施方法は、導入から、教示、モデリング、リハーサル、フィードバック、般化の5つの基本的技法を含む。トレーニングの形態には、トレーナーとクライアントが1対1で行う「個別SST」と、同じ特性や障害をもつ者を集めた小集団や学級や職場等の既存の集団で実施する「集団SST」がある（相川、2009）。現在、学校では集団SSTの方が一般的で、最近では、通常の授業とほとんど変わらない形態で実施でき、訓練対象となる者が自然場面で強化を受ける環境が整いやすくなるなどの利点から、学級をひとつの単位とした集団SSTが実施されることが多い（瀧ら、2008）。

しかし、本研究の結果は、対人恐怖心性と社会的スキルとの関連において、特に、対人恐怖心性下位尺度の[集団に溶け込めない悩み]、[社会的場面で当惑する悩み]、[自分を統制できない悩み]との相関係数が高かった。そこで、学級単位や希望者を対象とした支援よりも、担任や養護教諭が生徒の対人恐怖心性についてのアセスメントを行い、対人恐怖心性の高い者への個別的、または少人数グループでの支援が効果的であると考えられる。[集団に溶け込めない悩み]は、集団という対人場面に溶け込んで自由にふるまえないという非社会的側面に関する悩みを表す（堀井ら、1997）。そこで、安心できる居場所としての保健室や相談室等の機能の充実を図った上で、生徒がありのままの自分を表現しながら自分の気持ちを整理でき、集団への適応につながるスキルの獲得を促す支援が必要であると考えられる。[社会的場面で当惑する悩み]は、シャイで引っ込み思案ゆえに生じやすい臨場的な社会的不安意識を表す（堀井ら、1997）。それは、社会的自尊心尺度との強い負の相関が認められている（堀井ら、1996）。そこで、保健室や相談室等を利用して少人数での対人関係の経験を積み上げることで、人との関わ

り方を学ぶとともに自尊心を高め、対人場面での緊張感や不安を和らげていく支援が必要であると考え、[自分を統制できない悩み]は、自らの意思や感情を統制できないことに対する不安や不満感を表し、対人意識へのとらわれの中で生じる自己に対する否定的な問題意識の側面を表す(堀井ら, 1997)。それは、Y-G性格検査の劣等感と正の関連性が認められている(堀井ら, 1997)。自己を問題にする意識や、自分自身の内的資質に対する否定的側面、劣等感を持つこと自体が人に晒され、露呈してしまうことに不安を持ちやすくなる(堀井, 2002)。そこで、成功体験を重視し、成就感や達成感を体験させ、支持的な支援を行うことで自己を肯定的に認知できるように促す支援が必要であると考え。

そのため、集団SSTを行うよりも、保健室や相談室等での日常的な支援の中に、以上のような社会的スキルの向上を目指した指導を取り入れることがより有効であろう。保健室は、生徒が自分を立て直すための空間であり、保健室には、自分を立て直すための時間がある(阿部ら, 2009)。保健室等で社会的スキル向上のための支援を行うことができれば、生徒が自身のペースで自分の気持ちや願望に気付き、自ら目標を設定し、それに対する成功体験を積み重ね、自分への信頼や意欲を高めながら、本来の自分の力や新たな力を発揮することができる考える。

本研究は横断研究であるため、社会的スキルと対人恐怖心性の因果関係まで言及できない。今後は、縦断研究により影響要因を明らかにし、それに基づいた実証的な研究によって、高校生のための社会的スキルのアセスメント法やそのための指標、より効果的な支援方法を開発する必要がある。

## VII. 結 論

1. 社会的スキルの有意な正の関連要因の主なものは、男性であること、意欲、積極的な問題解決型コーピング、基本的信頼感、異性の交際相手や学校内の友人からのソーシャルサポートであり、有意な負の関連要因の主なものは、コミュニケーションの主な手段がメールであること、対人恐怖心性であった。

2. 社会的スキルの最大の関連要因は対人恐怖心性であり、特に、下位尺度の[集団に溶け込めない悩み]、[社会的場面で当惑する悩み]、[自分を統制できない悩み]との関連が強かった。そこで、対人恐怖心性についてのアセスメントを行い、高い者に対して、保健室や相談室等での日常的な支援の中で、個別的、または少人数グループの社会的スキル向上を目指した指導を行うことが望まれる。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、快く調査にご協力くださった高等学校の先生方と生徒の皆様方に心より感謝申し上げます。

## 〈引用文献〉

- 阿部康子, 井上仁美, 伊賀上睦見(2009): 保健室登校を経験した高校生の教室復帰に至るまでの気持ちの変化, 日本養護教諭教育学会誌, 12(1), 65-75.
- 相川充(2009): セレクション社会心理学20 新版 人づきあいの技術 - ソーシャルスキルの心理学, サイエンス社, 東京.
- 相川充, 藤田正美, 田中健吾(2007): ソーシャルスキル不足と抑うつ・孤独感・対人不安の関連: 脆弱性モデルの再検討, 社会心理学研究, 23(1), 95-103.
- 相川充, 佐藤正二(2006): 実践ソーシャルスキル教育 中学校, 図書文化社, 東京.
- 甘佐京子, 藤田きみゑ, 牧野耕次, 他1名(2004): 女子学生の携帯電話によるメール中毒状況とその心理的特徴 (第2報) - 女子大学生と看護学生との比較, 人間看護学研究, 3, 43-49.
- 青木邦男(2005): 高校運動部員の社会的スキルとそれに関連する要因, 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 5, 25-34.
- 青木邦男(2007): 高校生の攻撃性, 自己効力感, 社会的スキルならびに精神的健康の関連性, 学校保健研究, 49, 38-46.
- Arkowitz H., Hinton R., Perl L., 他2名(1978):

- Treatment strategies for dating anxiety in college men based on real-life practice, *The Counseling Psychologist*, 7(4), 41-46.
- 江村理奈, 岡安孝弘(2003): 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究, *教育心理学研究*, 51, 339-350.
- Erikson E. H. (1955) / 仁科弥生(1977): 幼児期と社会1, みすず書房, 東京.
- Erikson E. H. (1959) / 小此木啓吾, 小川捷之, 岩男寿美子(1973): 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房, 東京.
- 後藤吉道, 佐藤正二, 高山巖(2001): 児童に対する集団社会的スキル訓練の効果, *カウンセリング研究*, 34(2), 127-135.
- 原田朋枝, 島田修(2002): 社会的スキルの自己評価と対人不安との関連, *川崎医療福祉学会誌*, 12(1), 75-81.
- 堀井俊章(2002): 青年期における対人不安意識の発達の變化 (続報), *山形大学紀要 (教育科学)* 13(1), 79-94.
- 堀井俊章, 小川捷之(1996): 対人恐怖心性尺度の作成, *上智大学心理学年報*, 20, 55-65.
- 堀井俊章, 小川捷之(1997): 対人恐怖心性尺度の作成 (続報), *上智大学心理学年報*, 21, 43-51.
- 福山聡(2000): 大学生における社会的スキルと対人不安の関連性, *関西大学大学院人間科学*, 52, 213-223.
- 飯田順子, 宮村まり子(2002): 中学生のストレス対処スキルの育成の試み, *学校心理学研究*, 2(1), 27-37.
- 角谷慶子(2008): 少年犯罪・非行の精神療法 - SSTによるアプローチ -, *精神療法*, 34(3), 290-297.
- 金山元春, 後藤吉道, 佐藤正二(2000): 児童の孤独感低減に及ぼす学級単位の集団社会的スキル訓練の効果, *行動療法研究*, 26, 83-96.
- 金山元春, 小野昌彦, 大橋勉, 他5名(2002): 中学生の社会的スキルと孤独感, *広島大学大学院教育学研究科紀要*, 第3部, 51, 289-295.
- 金子恵一, 服部洋兒, 村松常司(2007a): 高校生の攻撃性と社会的スキルとの関係, *教育医学*, 52(4), 234-244.
- 金子恵一, 伊藤康児, 服部洋兒, 他2名(2007b): 高校生の攻撃受動性と攻撃性及び社会的スキルとの関係, *学校保健研究*, 49, 302-312.
- 菊池章夫(1988): 思いやりを科学する, 川島書店, 東京.
- 菊池章夫(2007): 社会的スキルを測る: KiSS-18ハンドブック, 川島書店, 東京.
- 岸本徹彦(2008): 刑務所における障害受刑者とSST, 前田ケイ・安西信雄編, *こころの科学 本人・家族のためのSST実践ガイド*, 53-59, 日本評論社, 東京.
- 小林真, 稲垣応顕, 丹保弘則, 他7名(2003): 高校生に対するソーシャルスキル・トレーニングの効果, *富山大学教育実践総合センター紀要*, 4, 15-23.
- 近藤花織, 村松常司, 平野嘉彦, 他3名(2005): 高校生の対人ストレスイベント, 対処行動とセルフエスティーム, 社会的スキルに関する研究, *東海学校保健研究*, 29(1), 17-31.
- Lazarus R. S., Folkman S. (1984) / 本明寛, 春木豊, 織田正美(1991): ストレスの心理学, 実務教育出版, 東京.
- Leary M. R. (1983) / 生和秀敏(1990): 対人不安, 北大路出版, 京都.
- Liberman R. P., King L. W., Derisi W. J., et al. (1989) / 安西信雄(1990): 生活技能訓練基礎マニュアル, 創造出版, 東京.
- 宮内勝(1995): 生活技能訓練 (Social Skills Training) の展開, *精神医学*, 37(1), 45-50.
- 文部科学省(2003年4月11日付): 今後の不登校への対応の在り方について (報告), 2010年8月20日, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/public/2003/03041134.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03041134.htm)
- 村瀬洋一, 高田洋, 廣瀬毅士(2007): SPSSによる多変量解析, オーム社, 東京.
- 西岡慶樹, 坂井誠(2007): 小学生における社会的スキル訓練の臨床的研究 - セルフモニタリング・フェイズを取り入れたSSTの検討 -, *愛知教育大学研究報告 (教育科学編)*, 56, 37-45.
- 小川雅美(1991): PBI(Parental Bonding Instrument)

- 日本版の信頼性、妥当性に関する研究, 精神科治療学, 6(10), 1193-1201.
- 興津富成, 関戸英紀(2007): 通常学級での授業参加に困難を示す児童への機能的アセスメントに基づいた支援, 特殊教育学研究, 44(5), 315-325.
- 小野寺正己, 河村茂雄(2003): 学校における対人関係能力育成プログラム研究の動向 - 学級単位の取り組みを中心に -, カウンセリング研究, 36(3), 272-281.
- Pine A., Kafry D. (1987): Coping with burnout, J. W. Jones, The burnout syndrome, 139-150, London House, Parkridge, IL.
- 下坂剛(2001): 青年期の各学校段階における無気力感の検討, 教育心理学研究, 49(3), 305-313.
- 白井利明(2006): 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴 - 変容確認法の開発に関する研究 (Ⅲ) -, 大阪教育大学紀要第IV部門, 54(2), 151-171.
- 杉浦浩子, 竹内麻乃, 杉浦春雄(2007): ストレス反応および対人恐怖心性が大学生のソーシャルスキルに及ぼす影響, 健康レクリエーション研究論文集/実践報告集, 4, 5-14.
- 庄司正実, 庄司一子(1992): 職場用コーピング尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, 産業医学, 34, 10-17.
- 瀧浩平, 柴山謙二(2008): 小学生の学級を対象としたソーシャルスキル教育の効果—実施手順の工夫と予防の観点から—, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 57, 145-156.
- 田中重人(2001): 無効回答の発生, 清水新二編, 家庭生活についての全国調査 (NFR98) 報告書No.2-4 現代日本の家族意識, 155-179, 日本家族社会学会全国家族調査 (NFR) 研究会, 東京.
- 谷冬彦(1996): 基本的信頼感尺度の作成, 日本心理学会第60回大会発表論文集, 310.
- 渡辺弥生(1996): 講座サイコセラピー第11巻 ソーシャル・スキル・トレーニング (SST), 日本文化科学社, 東京.
- 渡辺弥生, 原田恵理子(2007): 高校生における小集団でのソーシャルスキルトレーニングがソーシャルスキルおよび自尊心に及ぼす影響, 法政大学文学部紀要, 55, 59-72.
- 渡辺弥生, 山本弘一(2003): 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果 - 中学校および適応指導教室での実践 -, カウンセリング研究, 36(3), 195-205.
- 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子(1982): 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 吉田俊和, 高井次郎, 元吉忠寛, 他1名(2005): インターネット依存および携帯メール依存のメカニズムの検討 - 認知 - 行動モデルの観点から -, 電気通信普及財団研究調査報告書, 20, 176-183.

【Original Article】

## Factors related to social skills among high school students in Nagano prefecture

Mieko ARUGA <sup>1)</sup>, Eiko SUZUKI <sup>1)</sup>, Akira TAGAYA <sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> Nagano College of Nursing

**【Abstract】** The aim of this study is to identify factors related to social skills in high school students to help develop an assessment index and a support method that can be used daily to improve social skills. A questionnaire including a scale for social skills (KiSS-18: Kikuchi, 1988), demographic variables, living environment, lifestyle, and psychosocial factors was distributed to 1,756 students belonging to three public high schools in Nagano prefecture in Japan from June to July, 2009. The hierarchic multiple linear regression (HMLR) analysis used to clarify factors related to social skills consisted of three steps of variable inclusion: 1) demographic variables (forced), 2) living environment and lifestyle (forced), and 3) psychosocial factors (stepwise selection).

A total of 1,539 (87.6%) students responded and 1,169 (66.5%) provided valid data. In the HMLR analysis, gender, email as major means of the communication, anthropophobic tendency, motivation, active stress coping style, basic trust, social support of friends of the opposite sex, and social support of school mates were significant predictors for social skills, with adjusted R square of the model being 0.55. Of them, anthropophobic tendency contributed most strongly. Social skills training (SST) was to be used as a support method to reduce school maladjustment and improve personal relationships. These results indicate that it will be more efficient to assess anthropophobic tendencies, and to teach social skills to highly anthropophobic students via the health room. These findings suggest the need for longitudinal surveys and empirical studies to develop an effective support method for high school students.

**【Key words】** high school students, social skills, anthropophobic tendency, social skills training (SST)

---

有賀美恵子  
〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694番地  
長野県看護大学  
Tel:0265-81-5179 Fax:0265-81-5179  
Mieko Aruga  
Nagano College of Nursing  
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan  
Tel: +81-265-81-5179 Fax: +81-265-81-5179  
E-mail: aruga@nagano-nurs.ac.jp